

次のA、Bの文章は、村上靖彦『ケアとは何か』（中央公論新社2021）の一節です。本文をよく読んで、以下の問いに答えなさい。

A

内側から感じる〈からだ〉の感覚や動き、好不調、気分といったものは、日常的に「心」と呼ばれているものと混じり合う。つまり、私たちの内側からの感覚という視点に立つたとき、身体は客観的に扱うことのできる「臓器」ではなくなり、心と〈からだ〉の区別はあいまいになっていくのだ。

ケアは、このようにあいまいな〈からだ〉と積極的に関わるものである。身体を治療する医療と、〈からだ〉にアプローチするケア。この両者は、微妙に重なり合いつつも、区別される。たとえば終末期に身体的な治療が難しくなった場面でも、1〈からだ〉を通してケアは続く。

B

願いごとは、しばしば体の快適さや五感に関わる。たとえば「これを食べたい」という望みは誰しも基本的な欲求として持っているもので、それだけに大事な望みである。私の祖母は亡くなる直前、寝たきりになってからも甘いものを好んで食べていた。固形物を口から食べられなくなっても、オロナミンCをいつも飲んでいた。もともと食べることが好きで、私も子どものころはいろいろなお店に連れていってもらったものだ。そうした飲食へのこだわりは、最後まで変わらなかった。

次の語りは、HCU（高度治療室）に、ツトめる若手看護師が、初めて看取りを経験した場面を語ったものである。私のゼミ生だった岡部まやさんの修士論文から引用する（急性期領域の若手看護師がもつ死生観に関する現象学的考察）。

その次の日に一般病棟いって亡くなったんですけど、「……」なんか「心臓のお菓」もうめっちゃくちゃな量いって。「……」で、なんかもう先生も治す治す、みたいな感じではなくって。ある程度ひろーい感じで見れる人だったので。「本人がどうしたいかだよねあとは」っていう感じだったので、「どうしたいですか?」って。「……」そのプリンが食べたんですよ」っていう話とか。「生ものなんやけど、お寿司が食べたくなって」っていう話とかしてて、『病院でお寿司かあ』って思ってたんですけど。先生にいったり、「こっそりやったらええんちゃう」みたいな話になって。はは。「家族さんに自己責任で持ってきてきてもらいね」って感じで、結局、次の日かなんかに食べてはったみたいで。「何飲んでもいいの」っていわれたって言って、部屋にDCM「拡張型心筋症」の人にはありえないくらい持ち込み食がぶわーって置いてあって。本人もそれがすごい満足してて。「食べたいもん食べれたー、食べれるっていいなあー」みたいなの。

食べることは「〈からだ〉とは何か」という問いに直結する。一連の食べる動作や、美味しいという感覚、それらすべてが本人にとつての〈からだ〉となる。それゆえ、「大好きなお寿司を食べて満足する」というようなことが、病気による衰弱と医療による制限のなかで失われかけた自分の〈からだ〉を回復する出来事となる。

末期の心臓病で厳格な食事制限を強いられる最中に、プリンや寿司が食べたいという願いごとをされたとき、どうするべきか医療者なら悩むだろう。病気を悪化させるリスクだけでなく、エイセイ管理の問題などもあるかもしれない。つまり、この場合には食べることが医療と対立している。ケアが医療と乖離するケースだ。しかし、医師も「食べたい」という願いの重要性を経験上理解している。その願いが叶うことで、本人は「食べたいもん食べれたー、食べれるっていいなあー」と大きな満足を得る。

この「満足」というのは、〈からだ〉を再発見する出来事でもある。本人にとつても家族にとつても、人生の最期に悔いを残さないための大事な経験であろう。一見すると、些細なことだけれども、こうした願いの充足は生活上の大きな意味を持つ。もしも「食事制限があるからだめ」「安全を確保できないからだめ」と言って、ルール優先で切り捨ててしまったとしたら、本人にとつて大事な願いが叶えられないままになってしまい、当事者が置き去りになったまま亡くなってしまふことになるだろう。

「お食い締め」という実践がある。人生の最期にさしかかって、自由にものを食べることがついに難しくなってきたとき、家族に見守られながら、本人がとりわけ食べたいものを食べるという行為だ。先のお寿司の例もその一種といえるだろう。

お食い締めを實踐してきた言語聴覚士である牧野日和の本から、もうひとつ例を引く(牧野日和『最後まで口から食べるために』2頁、五二頁)。

裕子ちゃんは小学3年生のときに神経難病にかかり、胃ろうを造設し禁食になりました。裕子ちゃんは食べたいと訴えましたが、お母さんは「元気になったら食べようね」とごまかしました。そして、裕子ちゃんはみるみるうちに身体機能が低下。胃ろうのまま約2年間過ごしました。「……裕子ちゃんの身体はやせ細り、全身の筋力が衰え、ぐったりとしています。余命1ヶ月となり、お母さんはアセリました。「また食べようね」とごまかしたことを罪悪感として背負い続けてきたからです。お母さんは訪れた私に、なんとかして最期に口から食べさせてあげたいと懇願しました。

裕子ちゃんの「食べたい」という願いは医療的な判断によつて妨げられてきた。だが、死が近づいてきたとき、そのことに母親は「罪悪感」を感じる。それゆえ、願いを叶えたいと懇願する。母親の懇願は、子どもが食に対して抱いた〈小さな願い〉が、本質的な重要性を持つという直感(確信)に由来するのだろう。誤嚥性肺炎のリスクがある際には、通常はタンパク質を食べることは避ける。「すぐに命を落とすかもしれない」と牧野は母親に告げた。しかし、母親と主治医の熱望に背中を押され、母親が食べさせたいと願った手料理のプリンを食べさせることに決める。続く場面を引用する(同、五五頁)。

二口めのプリンも一口め同様、のどの奥にゆつくりと落ちていくのが見えました。しかし、すぐには嚥下反射が起きません。「誤嚥したのでは!」と危惧した瞬間です。裕子ちゃんのどろどろと反応しました。様子を見守っていたお母さんは、「食べた、食べた!」と言つて号泣しました。そして、「裕子もありがとうつて言ってます」と言うのです。その言葉で私は裕子ちゃんを見て、魂が震えました。なんと、無反応、無表情だった裕子ちゃんの頬を大粒の涙が大量に流れていたのです。母の言うように裕子ちゃんは食べたかったのです。

プリンを食べたことで「無反応、無表情だった裕子ちゃんの頬を大粒の涙が大量に流れて」、失いかけていた生気を裕子ちゃんに取り戻す。生気とは〈からだ〉そのものだ。このあと裕子ちゃんは主治医の予想を遥かに超えて一〇ヶ月間生きた。「食べる」という〈からだ〉の基本的な快と願いが、生を支えた。こうした実例は、統計的なエビデンスとは異なる次元で重要な意味を持つ。むしろ、内側から感じられる体感であるがゆえに、その重要性は客観的なデータには現れにくく、個別のライフストーリーを通して見えてくる。

ここでは、母がつくったプリンを食べるといふ経験は取り替えようのない個性を持つ。誤嚥性肺炎のリスクを冒してまで、母がプリンにこだわったことには理由があっただろう。裕子ちゃんの人生と母親との関係全体に関わる何か背景にある。母親がつくったプリンは、裕子ちゃんが元気だったころの好物だったのかもしれない。〈小さな願い〉は、個別的なものであり、それゆえ必然的に人生のストーリー全体を背負う。

大事なことは、食べたいという裕子ちゃんの願いが叶ったことだけではない。願いを叶えることで、齟齬が生まれていた親子がもう一度つながり合ったということも大きな意味を持つ。本当に裕子ちゃんが「ありがと」と言おうとしたのかどうか、それはわからない。しかし、涙を流すという応答は、母親によつて感謝として受け取られた。このとき、〈出会いの場〉が開かれたといえる。本当の気持ちをこまかし、避け続けるなかですれ違ってきた母娘が、願いを叶えることにより、コミュニケーションを取りなおしている。食べ物という〈小さな願い〉は、実は親子関係全体の焦点であったのだ。〈からだ〉の肯定が〈出会いの場〉を開き、親子関係を再編成したのである。

問一 波線部 a「ツトめる」、b「エイセイ」、c「乖離」、d「些細」、e「アセリ」、f「危惧」のカタカナ部分は漢字に直し、漢字はひらがなで読みを書け。また、g「エビデンス」、h「齟齬」の本文中の意味として最も適当なものを、後の選択肢からそれぞれ選び、記号で答えよ。

「g」の選択肢

(ア) 数値 (イ) 経験 (ウ) 根拠 (エ) 傾向 (オ) 推測

「h」の選択肢

(ア) くいちがい (イ) 不信 (ウ) 憎しみ (エ) 対立 (オ) あきらめ

問二 傍線部1「からだ」を通して「ケア」とはどのようなものか。次の選択肢から最も適当なものを選び、記号で答えよ。

(ア) 身体を治療する医療 (イ) 患者の内側からの感覚を客観的に扱う医療 (ウ) 患者の内側からの感覚に積極的にアプローチしていくケア

(エ) 患者の終末期に行う苦痛緩和を目的とする処置 (オ) 患者の感覚や動き、好不調、気分を分析して行う医療

問三 傍線部2「個別のライフストーリー」とあるが、「裕子ちゃん」と「お母さん」との間の「ライフストーリー」を、筆者はどのように推測しているか。本文中から、それが書かれた一文を抜き出し、その最初の五文字と終わりの五文字（句読点は含まない）を書いて示せ。

問四 傍線部3「からだ」の肯定が「出会いの場を開き、親子関係を再編成したのである。」とあるが、「裕子ちゃん」と「お母さん」の場合は、どのようなことがなされたということか。具体的に説明せよ。

問五 この文章を読んだの意見・感想を、将来看護の仕事に従事する者としての思い、考えを中心に、四五〇字以上五〇〇字以内で記しなさい。

※解答は縦書きとし、改行・句読点等の表記は、通常の「原稿用紙の使い方」に従うこと。